



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

1270
1



説くまほ虎乃處をつる

周

昭奚恤為楚將昭王問江石北
方之人畏昭奚恤何也對曰虎得狐
欲啖之狐曰無啖我天帝命我長百
獸若不信隨我後以觀百獸見虎
皆走虎不知畏已以為畏狐也北方
非畏奚恤實畏王之甲兵也

二十九八周よりひさしき事
なまとも今とよろ人情は
かくのこゑ主を畏れを嘆き
畏ふたしめりきづの虎を
あらじきつて天帝命ありて我
をよちいけてかしらと

なし後アシタ思アシタハ知アシタきアシタ多
多々アシタ小網アシタ隨アシタ事アシタ花
宮アシタ見アシタ百獸虎アシタ來
山アシタ見アシタ皆アシタ之アシタ虎アシタはれ
乃アシタ畏アシタ而アシタ獸アシタ之アシタ有アシタ至
也アシタ是アシタ也アシタ思アシタ北方アシタ之アシタ安恤アシタ
要アシタ矣アシタ宜アシタ王アシタ甲兵
在アシタ要アシタ

隋

一堯君素湯陰人仕為擊鷹郎

將從屈突通拒唐師于河東為
木鵞除表於頸浮之黃河河陽
得之連於東都唐太宗詔曰桀犬

吠堯有幸倒戈之志疾風勁草實
表歲寒之心又節義序論曰威烈
所著與河海以爭流峻節所繩不
松而俱茂

君素八隋之郎將工として唐の太
宗に敵對し其主不忠義あるを
太宗御賞美アシタ之アシタ之アシタ凶固アシタ
自アシタれと後アシタ而アシタ自アシタ之アシタてし
思アシタ之アシタ人アシタ之アシタ之アシタ載不朽
乃史冊アシタ之アシタ傳アシタ

一要離刺客也吳公子光亟殺王

僚憂其子慶忌在鄧國向計于子
胥子胥進要離離曰吾誣負

罪出奔殺吾妻子且出怨言慶忌必信
光乃殺其妻子于市且出怨言聞于諸
侯離見慶忌于衛言計而喜與之俱渡
江至莫地乃投慶忌于水三淬其頭慶忌謂
左方曰莫殺之令還吳以旌其忠離至江陵
伏劍以報

宋
一姚興 梁州人以武功累遷荆湖南路兵馬副都
監金兵渡淮興四百騎當金八十萬自辰至午
戰數十合後兵不至父子俱死金人相謂曰
有如姚興者十輩吾屬敢前乎事聞詔

贈觀察使更謚忠毅立廟祀之

今五句八詩三十首通鑑
卷之二十一
也亦可事半功倍次第
在先以之次第之
大學毛公之子中庸論傳孟子
是之謂也人非生而善之詳
教人以之修德行儒者尤之
以之謂也詳平四書八宋以之
事孟子八諦子而中 大學八中
庸八以之為子也人也之有
古學新學今學有之以之為
之以之為力取力之之口言之
大才多學之能生之也下又之
法也。之之之而之之之也

往々と人を師とし學ぬをし
うかとおもを師を得るゝ事すも自
身つとじよ志たり承りされ共業
を成し遂く業を事すれども渡
世のまへうりとこやしそまと
なしへらんとすも書と談すと
懶怠をほほへる富貴と樂とす
真乃事へ学えんと決意す

一人の学えんとせられへそりん候
多きのなしと云ふ薫ハ五穀す
てあやしなひをなすりんわきす
まちへなと親切に教へとやとじ
能く事 李原忠信の名理仁政
禮智の心すと詳く知り候
をくめまこと一と説き教へ候
一人の学えんとせられへそりん候
多きのなしと云ふ薫ハ五穀す
てあやしなひをなすりんわきす
まちへなと親切に教へとやとじ
能く事 李原忠信の名理仁政
禮智の心すと詳く知り候
をくめまこと一と説き教へ候

二つと教終事なり 一切經乃
七千餘巻八寺院内にあり
たくことなくあへて一二より上
と子教ありての事なり法華
般若老を甚ざりたる事あり
セラ文字にて翻譯をせり中華
の知識庄の書ハ盡く孔子孟子
学すよりて一變して釋氏より
されど其道ハ之より走華文武
周孔を離リてあくまでも佛徒
がて上しと云ふも西政の聖通
を以りてあくまでも佛徒を施
處ハ多し之より

一三三
ニシテアリトシモ増々禮を
ニシテアリトシモ増々禮を
セラと或ハ富貴年驕をせ
食ふしゆつてよしと在
聖人あ御時賢者あらわし
をえりありあらわしと今
侍と玉公大臣とふくらひ
をきとしこ縁事なり後ノ君
とがり臣とがり父子兄弟夫婦
朋友乃人乃理と一二を以す
車なく教へ乍ら書をよしも
せきりせんたなふとなく
今夕うつめ悪事なけれ
入り中の方人よしとす

子のな生むた、苦るに
て樂をうなまと教へ教わ
こうとあううがひなんかよ
め よろしくあし天地の
ひらけたうすしより山と海と
川と車の移をゆくもを國
郡の東う西、南う北、其
あくあつてつなうら是を又處
きあくしあたうち圓の代の君
臣の法先れを州郡縣里の筋
までゆきと車なく是を居な
づくして詳うと所ニふ當る
乃得少くありそあくと一に上
りきれどよかとて天地
開闢より今、西まであ車何
なりと車なし是を
見しおせをし、四しんが
いとすううねうるんとて
遠くろまうに
一博識と云ひ、その大抵
文車を詳し、聞く人多か
やう車はそれあらうか勘合
徳重の道理として自他せう益
あ、真うぐくよ都として可
其方はまうとえうと八時よ
まうとえうと八時よ
差過去とて、かく一人情を
つまひううして致倦わくと
よかんわく、かくひもとを
よくえあくと被是をあくと

智者シラフ少シカクすましき事モノ
世人セイジン心ハコトよしと定めスル事モノ
之シテふき師シキシありまサシ反ヘタりと
とも其ヒメ師シキシ反ヘタ言ハシマツ感カク得タマツセスル
紙シテ手ハシマツ碧シタマツ手ハシマツ和ハシマツ人ヒト也ヤハ
固シタマツ執ハシマツ手ハシマツ和ハシマツ人ヒト也ヤハ
門シテ少シカク現ハシマツてシマツしめ縫シタマツ以シテ以シテ
あハシマツ中シテ常シタマツ人ヒト教ハシマツ誨ハシマツりシタマツと
ちシタマツ智シタマツかくのシタマツとシタマツ人ヒト也ヤハ
かシタマツ不シタマツ孝シタマツナシタマツ子シタマツ不シタマツ孝シタマツナシタマツ子シタマツ也ヤハ
きシタマツ不シタマツ忠シタマツナシタマツ子シタマツ不シタマツ忠シタマツナシタマツ子シタマツ也ヤハ
めシタマツ不シタマツ理シタマツ子シタマツ不シタマツ理シタマツ子シタマツ也ヤハ
失シタマツ不シタマツ失シタマツ子シタマツ不シタマツ失シタマツ子シタマツ也ヤハ

一人シト乃シタマツ苟シタマツ穴シト穴シト人シタマツ也ヤハ
字シタマツ古シタマツ肉シタマツ字シタマツ陳シタマツ音シタマツ辨シタマツ歌シタマツ
古シタマツ竹シタマツ纏シタマツ竹シタマツ飛シタマツ土シタマツ逐シタマツ六シタマツ
肉シタマツ走シタマツ足シタマツ足シタマツ也ヤハ
瘦
肉シタマツ走シタマツ足シタマツ足シタマツ也ヤハ
肥
肉シタマツ走シタマツ足シタマツ足シタマツ也ヤハ

宋
姚瀛字子山福安人七歲能班史十七歲應舉居太
學以文章著名隆興初年進士凡四任教官嘗辭太
學通潛虛之教折著鳳凰臺集行于世

七歲上學時漢書至七十歲時出外任太學
生居山中文章著進士第四任教官後
數子皆成材鳳凰臺集行於世

漢
趙貞源即蠡吾人京兆尹和兄子孟鄉邪
太守行縣見不其令薛宣甚悅其後行屬縣
還至府令妻子相與見戒曰薛君廉至丞
相我兩子亦為丞相史後宣果代張瑞為丞
相除貞兩子為史時稱貞有知人與子之明
見云

人を以てとす。まんを見ゆる人を知
車唐と日本と見ゆ。得て車に車に
かく玄をも得て車に車に趙貞
ハ文人と紙と見ゆ。明あり。子
也。千古史冊とてりし後より一郷
邪。太守。ノリ巡見の時支配り。其と
子。和。令薛宣を見て甚く怪ひ。それ
御。脚。足。を。か。と。一。巡。城。を。府。年
區。に。妻。子。戒して。子。二。度。不。了。
内。子。不。其。力。令薛君。之。廉。
して立身して丞相となし。秋。兩。か。で
ま。と。は。立。相。乃。史。と。名。へ。と。子。薛宣
が。と。なく。張。瑞。ノ。代。り。丞相。と。名。る。時
趙貞。ニ。子。を。除。車。史。と。
として明。不。了。六。暗。引。暗。不。
愚。不。愚。不。六。暗。引。暗。不。
用。を。な。う。ゆ。ゆ。を。明。暗。乃。用。
一漢の趙咨。字は文楚。昨城と云ふ。
在。東海の相。拜せらふ。道。蒙
陽と云ふ所を過ぐ。今。曹嵩嘆して
曰。趙君。ノ。舟。と。過。く。是。モ。ハ。天下。乃
笑。と。為。え。即ち印綬を棄て。洛に
謁。日。計。を。停。と。さ。く。清節。名
を。著。セ。 趙咨。ノ。字。附。孝。約。名
あ。當時。盜。夜。中。よ。え。す。お。ひ。や。れ
車。ゆ。咨。母。驚。え。と。思。せ。

志士乃盜を迎て謝して父母先
てうつ病りすこしの衣糧を以て
おきに力餘ハミケ均らされ事子比
よりても惜ひ多きなまむるを
盜もうち入るを以ていりとらすじて
さうなこじよそろ名す。上云
有りては全體東海の相と爲
む人なりとへま

一漢乃包咸字子良會稽人也
東海之客也。未嘗不早得聲
晨音誦經一而自知之。誠あやしき
是とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
鄉里之子孝廉に舉又郎中
除せられ入て太子元論語と撰
御里之子孝廉に舉又郎中
除せられ入て太子元論語と撰

大鴻臚に累遷太子即位
時師傅乃恩才也。比少子
俸祿を加賜も包咸是を頂
戴して諸生の爲めよつて
給與。太子明帝(子)

一包咸乃志士也。父子學者
以之爲十三經二十一史也。號
之曰諸子百家盡くぞうて
義、うちやうて思ひ又材子
窮力窮とていつまでも
義の心がやうすくわゆる

天下之士多以爲事
尼山甚爲少師を揚上して
ありて是となしと云ふと
きくゆく。之が下に名づき
人を力傳を序す。博識と云
れ。五經不。通毛と云ふ。
書あよまざなしなど。又。毛
南。今。古事記。古文
書と記出して。即座に毛
例と諭し。毛と毛。ハ
天下の名あ。う。識者。毛
風時までり。其故實を訛出
是を。字者。わ。つ。毛。書。書
毛。毛。天下國。一。家。君。臣。未

政車。人車の専用とする。毛
自ら夢得し。凡日之。師
所。自然と領得。毛。今。毛
車。古。毛。箭。合。したる。
姐姑。したる。甲。座。千里毛。辨
定。毛。毛。書。毛。毛。毛。毛。
毛。要。毛。毛。毛。毛。功。毛。
毛。毛。毛。毛。毛。毛。毛。毛。
毛。毛。毛。毛。毛。毛。毛。毛。
毛。毛。毛。毛。毛。毛。毛。毛。
毛。毛。毛。毛。毛。毛。毛。毛。
毛。毛。毛。毛。毛。毛。毛。毛。
毛。毛。毛。毛。毛。毛。毛。毛。

乃華麗を以て之を正心
義も自爲行仁王を人爲の
たゞしきとのじゆとす
在しめたまを素嘗もるに
よりもやれどもを学び
わ根本とてひそと定め
改めて文字を增長せ
いきをあらわす堅固有
り出見れ日を有む程矣

漢趙溫すず歎たん大夫當雄飛

安能雌伏竟棄き去さへ不爲しめ京兆
巫みとす雅よ大志おほしとす史し
人ひと傳つためし忠孝取義しゆぎ節見
名めい支しを天下げんわ公くわ

口是碑ひ其人じんを評ひ

趙氏せう記きも大きおお事ことなけ

子こ歎たんして少すくな大丈夫だいじゆ雄飛ゆうひし

名めいをよく時代じだい芟そよの名言めいげんと

官くわんを棄きてちの清操せいさうを

取とり其その時とき不ふを知しれかゆ
たゞよ已いて知しれかゆ國くにの

君くみ民みんと不ふを知しれかゆ
時とき不ふいといハ雌伏しゆふもに因いんし大丈夫だいじゆ

まさう雄飛ゆうひとこそと歎息たんきし
を爲官めいくわんとすも宰相さいしょうハ學がくえんあ
人ひとをとよきく仰あおひそえて今いま事こと
えろと用もちひ書かはよものハなづめと
車くるまととさせや從僕つぐとして昔むかわ
治亂じらん乃の君臣きみの賢愚けんぐとと其その要うを

志士傳

一防内乱ひるはを七君と通ふ先に國
を守りて下とされともしたて自節を
すらめあや。夷君素河東を守
て唐兵を助くことを甚くほんとし
てさうみを之降事といつても露
禮として是を極くとことも後
其妻をとりて是をすれ
夫易素年號して妻君をす
城門守り事とし、隋室
すて下りてひり。君何ゆくと自
う送し、身もしくりて妻と
をとだもけ後とて郡主あ
さるひ天下有名義婦人わ
かす。シラレらをひきと健

射 張良進 死す。死の身と
いとなく戰没を唐一統の時
忠義をあく。詔ありて蒲州刺
史と贈り里を廟祀を又義子
族を大すりて以聞せよ。又
圓文興。三八時分。忠義の士を
養育するハ太平の基を鞏固す
から要す。大將ろそろそ
是のうえ多く不恥を十分
達せざるをもむ理す。

一人ゐてのうよたしなみ又
つてしまふをつとひなと
是をよきあひなりと思ふ
わふしてむづづづの
うをんちあもと其傳ある

又くもと師友なきて其事と
きくも一通り人わざの理と
自然とそろ善悪利害を知
ゆどく心不徹（空もれ）
誘引せりゆきゆきゆけ
自ら利非を知めせず。以致
至して甚とあやし忠義
一庭わ義賛（よし）ハ耻りは
吉とぞして古今わねと義事
あゆと見てアラマサ
明辨（めいべん）ハきうづき
よく安危を重ねぬ俗（よの）
う之れ誠心肝（まこと）
誠あきくよく是と信（の）
ミニ入る萬里城（よろじゆう）
とと心安セシム（よし）ハ万人
不離（ふり）ハスの體（たい）一騎
當（とう）の吉（よし）たと勇（いさ）
士（し）へて死（し）むる所（ところ）
列（れつ）す。君（きみ）あくよ不（ふ）吾
勇（いさ）あやまち甲（こう）を立（た）ず
少（すこ）文武兼備（ぶんぶくかんび）とての心
とだかみに此（こ）しひ御（ご）
学（がく）かろりとあや

一古（こく）人（じん）の念（おも）ひ不（ふ）世（せ）事（じ）
家（いえ）事（じ）人（じん）は三（さん）と真（ま）ろ今（いま）

すり邊て我、一代をりやうとも
天命アまうせころびにこうは古人
乃名アうき風流文雅ア孝オ忠
信アキチ不朽ア賢者をたつて
もとめ聖人が教を守り一分を
昧さぬ人乃興廢を自在不坐勧
ちうハ世主用もうて妻へく前を
見ゆかひうく一生あそひうくを
きみ善安ア安置をまとう
風吹りも動セテ天邊月とゆ
ア後罪ハすこす 定うそう世乃
變遷ハ大小多寡あなく云々天乃
教ア之、所ア其時ニ常
其之トドケル事ア正ア又
人止みて家ニひと家ナウシテ余
一

ウヒ、コトハうきを考ム先
祖ア功勞をしこうとを
再興ス、スレアハ御も御没
蹟跡としてソクヘ教ル、たゞも
大アムシミリの人にアトテ
積善ハ餘業ア、積悪ハ餘殃有
理是トウソムモミテ、人を殺
ヒテ死人を活セし、ヒトアフリ
積悪トウソムモミテ、人を殺
ヒテ、ソレ積善ハ人を育ムリの事
をぞうやうす、えろくまと達塔を
たづか御もアソブアソブ王公とふ
ととえアソブキタ塔を三三圓形
功德と武帝ア多く修ム不善と

すまうあらひ俗よし名聞など
乃御よしてとんとふ人乃愚見
えを傍危てありあきしれ古
かうすりての善車ハひきそり
天工奉もれどもをもてては其心
す一點も悪ありまじな理なし
善とあらうとひきれどもみ
がくひひそり悪車ありとい
其の好車とぞまくとぞふ
りを夏車とぞハ妙もがく難い
況や悪車とぞ孝オ忠信の四字
を章じゆるまことのんじて天
理人理人じゆる純一の正意
もとくらむに人かくは露
混雜一てまことのんじて天
理人理人じゆる純一の正意
すひきこゑ故人じゆる師五
うづか遺恨うづかくたづれ

一僧道ヲ決定八日中一食樹下宿泊
飲木食と塵世を一拂して是
心頭上一點乃之半者也なく灑々
落々世尊行道をつゆ歴代
乃祖師乃あくま繪圖して貴
乃床棚ノあくま繪圖して貴
スハ経記なり精辯師は
津飯玉乃太子として婆羅树
下入滅りあくま棺も柳

石塔乃あまくに五面羅漢乃
應之乃寺と塔とぞれとなし
虚摩乃證功德以来次第ノ
塔長ノ諸宗乃え及ぶ在上
出世立身乃事半々有寺格を
争ひ衣服を次第以官位の席
をあさる佛書も儒書也ん
内其事も又俗をいのし山
を食上肉食して夫婦乃うかみを
あらきして南無河彌陀佛と
りて金銀を土砂を坐とす
ありハミラ佛佛わむと
孟子へきよ

やまとをとてこゝに化る
自然天災を自見の福
福めをとせんが
やまとをとてこゝに化る
よ漸く人形くとも
あらだれ人形くとも
思ひ立つやうなぬあり名す
風氣先手達あらせ一向今
用とみゆゑとおととゆ
司馬温公乃陰徳を寫りてり
子孫乃福とすくまのうこを
實を山野つまくとすくも父祖
乃うととつまくとすくも
つまくとすくも父祖
朝望一トモ是れもつまくつま
ふととととととととととと
代の史と見てそろそろと思ひ是れ

そしめろんろすくみ五六代セヘ
まつるるあまつたるハ務勿
多摩人一代きりよしてそむら
そろ五ひづくをよもたれども
人なれはたてのよろんよしてやうれ
北父の家をやうりすとく子孫を
つまねつまねとすとてやうれ
一人として一無ひありううえ
おきほき金うびりんこをしてわ
我立ひくうちわころみあわ
めく父兄わこのじゆを見想
明及ちにあひとところを羨み思ふ
まとき時わやうりて内うつむ
一と木わきまうせきもくま
何すかとぞうれとぞうひく
不思議にまうりうとうで嘆
一日二日三日とくとなく
がうりうをうりうを引け
とあうう裏うなう、あうへ
あうてうへうへ師友を揮ひ
後火をうじの上うふをハ不思議
たをあしき事あり故に事
アリ日月をじなしそ身上六
十人なり書院床欄うを
まことこれと人を因し極りと
を真物とすらうとくとく讀
むてはまくはたてをうりを
口惜しき事ナリ多くあら
上うをあらぬとあるハあら

すく御 少と洋服三三せん
在ハ玉板内迄ろしもせども
あめとつすらもなく一両を
可有りてあたきを多額の
車をよじて、ひきひき之
たえハ一生の寶を得失
うるも損益ハ云々と考へ
スかへし。とき老人ハ云々不
外き人を見てよしとゆきを
すめて社おハ云々時も師
走をよじて日月と遙
如今ハ下落不自由して東
洋に後悔ううりなしと云
ともあらぬ事叶ふと命
とありと云ひて、やんをま
後カタリと云ひて、ま
れす。あゝとあります
おもひよりは必ずあらわ
やうとあらわすとあらわす
ス、お情儀のうわ多あま
さんわざましてもう用ひ
ときまわらり。車ろ地
見るこころなれハ今
和と失ふと云ふ

晏嬰ハ一國の相となり車
をうけてるのをめ顔色
なれども、さすがに脚は
意氣揚こところあるは
まことに、見えてとて晏
子のことを見てとて晏
離縁をこじるハ人間もろ
やじりと高トありと
あえれなくしてか車牛
女じよもをうひしとて晏
かへしてたるをもて晏
嬰(國の神)と車上りて
まのトフリおりて晏
カツキ市ちとて晏

かく意氣揚とおでり
たちともと見る所の云々^{云々}
是此の事とまことに晏
服(けん)まくはく
志(し)とくとくとくとく
とのだくと晏公(是)見
たよけまハあくとくとくと
をまきと晏公(は)つまわる
て中大夫(は)官とさけ
はつまがゆみの人力道
理とあり、御(おとし)と善
うつゆるもぢやうむを

少くもよしと夫婦より
史冊にわざり 千古の物
をうとなくんからてらすみ
ちうまどりをまづ ひまづ
高きうみをあそんで遊ぶ
おづく

ころ御と晏るる御令れみを画る相
せて政と執つては不ふかを言を
詠と歌ふとしり住賢りりとぞと
こしゆすくよしゆし人わる理ひ
君を輔佐し取と安堵せしめ奉平
乃うきりきく画ゆくとくとおとおとおと
みうらどく君ハきくとくとおとおとおと
たるをと歸はれのとあるのうけい
風調雨順四海安樂によと圓らまむ
え良なるとれり成ともうすい聖代す
道ひまづくとまづ



